

ヴィクトリアン・マスキュリニティの確立と男性による看護

『嵐が丘』を中心に

西垣 佐理

はじめに

19世紀ヴィクトリア朝時代イギリスにおいて、ジェンダー・イデオロギー確立は時代の要請であり、男女の性的役割分業が明確に示されるようになった。その流れの中で、「看護師」という職業や看護行為も取り上げる必要がある。というのも、フローレンス・ナイチンゲール (Florence Nightingale, 1820-1910) のクリミア戦争時の活躍によって、それまで卑しい仕事からガヴァネス (家庭教師) と並ぶ「リスペクタブル」な女性の専門職として認知され、女性の社会進出が進むことになったからである。

文学作品でも、女性が看護をする場面が登場するが、エミリー・ブロンテ (Emily Brontë, 1818-48) の『嵐が丘』 (Wuthering Heights, 1847) では、男性のエドガー・リントンが妻キャサリンを看護する場面が登場する。本稿では、『嵐が丘』に見られるエドガーの看護の意義を、当時の男性性確立の議論とからめて論じ、男性による看護場面を描いた同時代作家チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の作品を参照しながら考えていきたい。

1. ヴィクトリアン・マスキュリニティとは？

『嵐が丘』における男性の看護を見る前に、ヴィクトリア朝時代の男性性確立をめぐる議論について簡単に触れたい。男性性に関する議論は、主に1980年代から行われるようになり、主として同性愛に関するものとヴィクトリアン・マスキュリニティに関するものに大別されるが、後者の議論にある「家庭的男性性」 (Domestic Masculinity) の確立は、ヴィクトリア朝時代における男性像を考える上で重要だと言える。また、ジョン・トッシュが指摘するように、社会的アイデンティティとしての男性性は、「家庭・仕事・同性の [仲間] から成り立っていた」 (Tosh, *A Man's Place* 2) と指摘していることから、いかに男性性確立にとって「家庭」が重要であったかが裏付けられている。

2. 『嵐が丘』における男性の看護と男性性

次に、ヴィクトリア朝時代の性的役割分業を明確に示す看護行為について見ていこう。当時、女性の看護は家庭内「義務」の一環で、物語の転換点として描かれる。だが、男性による看護は、看護人たる女性が不在の際に例外的に許されるものであり、ゆえに男性による看護はジェンダー・ロールの逸脱だとみなされる可能性を示唆している。

こうした前提を踏まえて、『嵐が丘』における男性による看護の位置づけを見ていきたい。物語全体を通して読むと、エドガー・リントンが妻キャサリンを看病した場面があることは注目し得る。「エドガーの看護は、一人っ子を看病した母親に負けないほど献身的なものでした」 (104) とネリーが語るように、彼の看護は母性あるいは女性性と密接に関係している。彼の看護キャサリンは回復するが、それで夫婦関係が改善しないし、物語も大きく転換しない。彼の看護について、ヒースクリフは「面白みのない、つまらない男」が「義務と人情」、「憐れみと慈善」で「薄っぺらい世話」をしている (119) と批判している。看護が女性の「義務」の一環なら、エドガーの看護も女性的なものになるため、ヒースクリフが彼の男性性を否定していると考えられる。だが、エドガーがジェンダー・ロールを本当に逸脱しているのか、という点には疑問が残る。そして、キャサリンが最後までヒースクリフを愛していながらエドガーと別れなかった理由も改めて考える必要があるだろう。そこで、『嵐が丘』に登場する男性たちの容姿や性格面から少し考えていきたい。

まず、エドガーは、容姿からして「優しげな面立ち」、「物思いにふけて愛想が良い表情」、「優美すぎる姿」 (52) であって、内面に「男らしさ」を見ることは難しい。妻に対しても常に優しく尽くしているように、エドガーはカレン・ブーリエが言う「女性的でより貴族的な」男性 (Bourier 19) であると描かれる。対照的に、ヒースクリフは「とてもほっそりとしていて若者のように見える」エドガーと対照的に、「長身で頑丈な、体格の良い男性」 (75) だが、暴力的でもある。ヒースクリフが、エドガーの献身はあくまで「ありきたりの人情と義務感」でなされていると指摘するが、ここで彼の言う「義務」が、ネリーの用いる「義務」とは意味をずらして語っていることに注意を払うべきである。ネリーがあくまで中立

的な言い方なのに対して、ヒースクリフがあえて義務の意味をずらして解釈することで、自分の正当性を訴えようとしていると考えられる。ただ、彼が献身的に看病することはない。

このように、二人の男性性には、容姿のみならず、暴力の有無や他者への献身性の有無といった面で相違が見られ、これらが二人を大きく分けている。とりわけヒースクリフの持つ暴力性は、ヴィクトリア朝時代の男性性確立に必要な要素でないことは注意すべきである。『嵐が丘』が書かれた初期ヴィクトリア朝時代は、男性性の意味が変化した時期である。R. W. コンネルによると、18世紀には「ジェントリー・マスキュリニティ」という考え方があり、「ジェントリーの男性性は力強く、暴力的なもの」(Connell 190)だったが、ヴィクトリア朝時代の男性性は、あくまでも家庭を一単位としてまとめ上げることが重視され、男性性確立の条件から「暴力」という要素が消えていった。そのため、ヒースクリフの持つ男性性は、作品の時代設定が1800年前後であることを考慮したとしても、前時代的なものだと言えるだろう。

ちなみに、語り手のロックウッドは、典型的なヴィクトリア朝の男性性の持ち主で、家父長制と性的役割分業の整った家庭を期待している。ただし、嵐が丘のような世間の常識から隔絶した空間では、彼の男性性が中心に置かれることはない。彼が傍観者の立場に置かれることで、作品内のジェンダー・イデオロギーの異常性が際立つのだ。それでも、ロックウッドの存在そのものが、この小説が単に前時代的なものではなく、ヴィクトリア朝小説であることの証明となる。また、彼が語り手として中立の立場にあることで、ヒースクリフとエドガーという両極端な二人の男性性を中和させる役割を担っているのである。

3. ディケンズ作品に見られる男性の看護

『嵐が丘』と同様、男性による看護事例がディケンズの後期小説『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1860-61)に見られる。この作品で主人公ピップの義理の兄で鍛冶屋のジョーは、病に冒されたピップの看護人として献身的に尽くす。ジョーも容姿や気質の面で看護人として機能するのに必要な「優しさを持った男性」として考えられている。ディケンズ自身が『大いなる遺産』の創作メモで、「ピップは病が篤く動けないとき一熱病のため部屋で横たわっている時に逮捕される。癒しの天使 ジョー」(GE 447)とあるようにディケンズはジョーに看護人として振る舞うことを求めていた。『嵐が丘』と異なり、男性同士の看護場面になるため、看護の本質は同じでも、結果は異なる。ところが、看護を担うジョーがジェンダー・ロールから逸脱しているとは言われない。彼は経済的に自立した鍛冶屋で、結婚して一家を構えている、という点で男性性を確立しているからである。しかも、ジョーは妻の死後、ピップの幼なじみのビディと再婚して新たな家庭を築くことで、逆転していた男女の性的役割分業の秩序を回復させているのである。

4. まとめ

今回はヴィクトリア朝の男性性確立に関する議論を見た後で、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』におけるエドガーの看護行為と男性性確立について、ディケンズの『大いなる遺産』の事例と比較することで論じてきた。確かに、『嵐が丘』の世界は、暴力に満ちた極めてロマン派的な家庭であり、ヴィクトリア朝時代の家庭的父権制を持っているとは言いがたいし、作品世界には性的役割分業の逆転も見られる。だが、エドガーの看護行為は決して彼の男性性を否定するものではなく、家庭を守り、一家の長たる経済力と権威を持った典型的な男性性を確立している、とさえ言える。しかし、男性による看護とジェンダー・イデオロギーの構図が大きく揺らぐのはヴィクトリア朝時代後半のことで、『嵐が丘』の頃はまだそこまで至っていないというのが結論である。初期ヴィクトリア朝小説である『嵐が丘』や『大いなる遺産』にみられる男性の看護行為は、理想的男性像を作り上げていく時代への過渡期にあって、極めて曖昧な境界線上におかれるべきものだと言えるのではないだろうか。

引用文献

- Bourier, Caren. *The Measure of Manliness: Disability and Masculinity in the Mid-Victorian Novel*. U of Michigan Press, 2015.
- Brontë, Emily. *Wuthering Heights*. A Norton Critical Edition, Fifth Edition. Norton, 2019.
- Connell, R. W. *Masculinities*. Second Edition. Routledge, 2005.
- Dickens, Charles. *Great Expectations*. Oxford UP, 2008.
- Tosh, John. *A Man's Place: Masculinity and the Middle-Class Home in Victorian England*. Yale UP, 1999.